



「またいなくなっちゃった」

幸子は、ひとり言を言いながら、昇降口を出た。

下校班が決められているのに、二年生も三学期になると、男の子たちは下校班なんてぜんぜん守らない。校庭に出るとすぐ走り出す。今日は土曜日で半ドン、お弁当もないから特に速い。あつという間に姿が見えなくなってしまう。

二月の末なのに、今日は風もなく、おだやかないい天気であつこう温かい。残された四人の女の子たちは、上着を脱いでランドセルの上にかぶせたり、マフラーを振り回したりして、だからだと歩いていた。お腹が空いているせいか、あまりおしゃべりもせず、田んぼの中の一本道をもくもくと歩いていた。

山田橋をわたって、幸子の家が近づいてきたころ、下校

班の一番後ろにいたしのちゃんが、急にそばに寄ってきて、

小さな声で幸子にささやいた。「今日、うちにこない？」

しのちゃんは、長いかみの毛をスラリと肩までたらし、いつもおしゃべりな洋服を着ている女の子だ。幸子たちが大好きな休み時間も、いつも教室にいて、窓から外を眺めていることが多い。幸子とは同じ集落なのに、家に帰っても一度も遊んだことはない。

お母ちゃんから聞いた話では、しのちゃんのお兄さんは、東京の私立中学校に行っていて、お母さんはそっちに行っていることが多いのだそう。幸子は、しのちゃんは、お母ちゃんがいけない時、さびしくないのでかなと思っていた。

「幸子ちゃんだけよ」